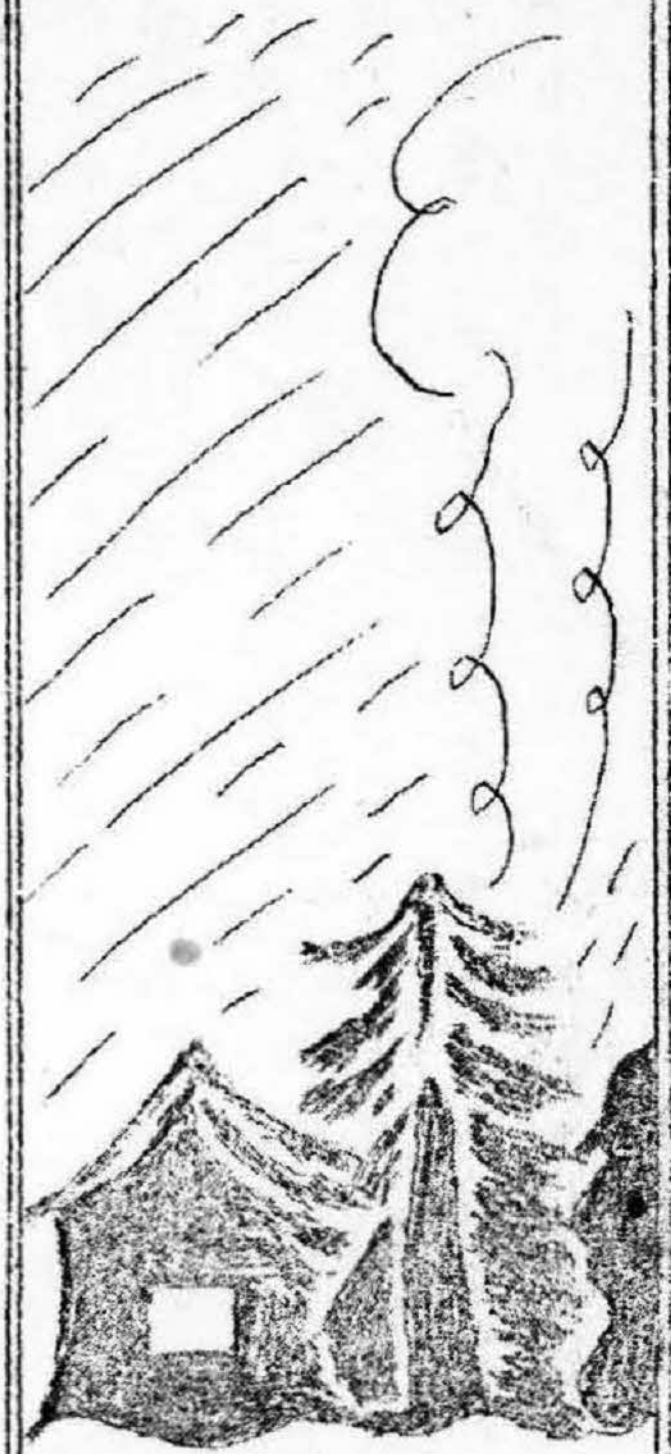


會報



第三年第五号

昭和七年七月二十五日発行

通巻二十号

赤澤林道を通つて四萬へ

何日もなら大低断つてしまふのであるが是非是非との事であつたので會社の仲間と誘はれるまゝ、に法師温泉から四萬温泉に至る山道を通つた。

土曜の午後六時二十五分上野駅で後閑で下車したのが恰時過ぎ夫れから自働車である。此道は今春三回峠を越した時に永井迄自働車で行った事があるの僕には二度目であるが墨を流した様な夜道の事として一寸と一も附近の様子に分らないか流石に永井村に至る分れ道の処丈は明きりかつた。

孫さんが十数年来の希望である法師温泉は流石孫さんの熱望の処であつて「ランプ」を使用と云ふ古風さがある。温泉はとも大規模であるが中は蔭暗く湯の底は砂利や巨岩が入乱れて氣を付けないうと足の先を痛める。

所謂赤沢林道とは西川の源流が法師温泉側を流れる支流と合する処より四萬川迄を云ふのであらうか。西川の主流にかゝつた橋を渡つて暫くト口途を行くと間もなくト口途が過ぎて右のすぐ上を新道が開けて居る。道はぐんぐん登つて附近の景色が段々大きくなる。流石上州と越後の境が近い大に山は深い感じがする。山々は附近の山々谷々は初夏の日光を受けて深緑を呈して居る。美しい景色である。

此の林道は一四五四米の赤沢山の八合目附近迄登りつめてそれから南方に派出した大きな尾根を馳せ下つて居るのである。

赤沢山を大急登りつめると今春スキーで通つた唐沢山の面の一二三一末の頃が明きり指摘される。春のスキー行が思ひ出されてならない。あの時は永井村から約三時間も登つてやつと彼処迄来たのだから随分難儀をしたものだ。今は時人も人も違えて此処から眺めて居るのだ、ぼんやり考へ込んで居て仲間と注意されて歩き出す。赤沢山の登りから愈々下り途になる処に美しい小屋があつた。其の綺麗な小屋の中に黒々と東京商科大学上競技部員の。木ッケー部員の。と書かれてあるスノーマンとして都では立派な紳士であつても山へ来

れば奇麗を山小屋に樂書をして平気で居るんだから山岳部員はスボーツマンに非ずと云ふ論理も生れて来やう。

此の小屋から四万川迄の途はどんなにか高々谷を思ひ出させた事であらう。あの美しい流れと樹

そしてト口途全部が同じである。水が少ないのと大きな瀧が掛つて居た位の違いがある。八時半頃法師温泉を出で四万川の本流に出たのが晝少し過ぎ温泉に着いたのは一時頃であつた。秋の紅葉時分には秩父を思ひ出させるに充分な風致がある。

六月第二日曜日

近 藤

初夏の宵

相成りまして変りばえもしませぬ相棒の近ちやんを樂屋から呼び出します。或る夏の宵のことです。「行こうかと誘つたら」「行こう」と答へるまことに響の聲に應ずる如きものです。はじめに誘つたのは私で、誘はれたのは近ちやんです。(奥さんのある人のことを書くのには是丈け氣を遣ひます)何処へ行くとも云はないで、二人は名に負ふ都大路銀座へ足を向けました。石や左の且那樣や御婦人方の御歴々然としてゐる中を一九三二年には子ト珍らしい顔をつつ並べて歩きました。とある所でアル

コイルを補給しました。クダ／＼しい、いきさつは坂きにして、再び街頭に出て、南から北へ、北から南へ、織るが如き人の中を幾度か行きつ戻りつしました。御存知かも知れませんが近ちやんはアルコイルがまわると足を後へ挙げ次に膝を伸ばす運動、俗に云へば「蹴る」と云ふ奇妙な習俗を持つてゐます。つロイドによれば、これは證成寺の月夜以来のことであるといふことになってゐるようですが唯今手許に文献がありませんから断言は出来ません。だが、かゝる際彼の後を行くのは少なからず蹴とばされる危険に曝されてゐる訳です。にも拘はらず、好い氣持で踏蹴と行く彼の後から「おい」と肩を掴む勇敢なる人物があつたのです。顔を見て「しまった」と思ひました。孫さんだつたのです。何故「しまった」と思つたか、再び精神分析によれば嘗てこの仁に對して、猫岳や三國峠で不穩不逞の志を懷いたこともあつたと云ふ事に起因すると思ひます。そこでこのしたゝかふる先輩(おゝ、此の人にも奥さんがあるのです、前言訂正します)このしとやかふる先輩に懇懇に御挨拶の言葉を申し上げました。「天網カイ／＼ですな」と。

またアルコイルを繋ぐ店に導かれ、飽和状態に達してゐる上に更に迷ひこまれました。こゝにトリオは揃ひました。演奏する唄はいつ

つもの山の歌曲の第一は八海山の荒行曲目の第二
奧利根探險、曲目の第三、エベレスト登攀。これ
で今晚の演藝放送を終りまして、外に出ましたら、
銀座街頭、暗雲低迷して今にも泣き出しそうな空模
様でした。

(ペンギン)

僕の近況

近頃僕は生れて始めて胃を痛めて居る。愈々あ
の鞣皮の如き強靱な我輩の胃壁にも破綻の日が到
来したかと思ふと情けない様な気がして浮世が優
ない。一層の事坊主にもなつて俗界を離れ針葉
樹會員並に学校山岳會員を檀家として一生を安樂
(?)に暮してやらうかとも考へたりする。

胃も身の内とか何んかと親切な忠言を先輩其他
から頂戴した頃は僕の胃も華かやものであつた。
一日に四度食事をする事位は普段の事である。朝
九時から正午迄の間に三度食事をして到々「ペンギ
ン」がへばつてしまつたと云ふ聞くも物凄いな話も
ある。然るに今や如何に朝パン半斤の四分の一、
晝會社で「トースト」、晩米飯一杯、体重恰八貫五百
匁は茲一週間の間に恰七貫七百匁、丁度一日に百
匁づつ減輕なつて行く割合である。此の割合で
行くと今年十二月二十三日頃になると零になる理
である。

体重が零になると云ふ事は此の世から消えてな
くなる事である。然し此の理論は頗る粗樸なもの
である。肉と骨とは異ふ骨は残るだらう、なんて
會報にこんなくだらぬ事を書いて申訳ない様な気
がする程くだらない。

四月頃胃痙攣をやつた後に来た胃痛である毎日
時間を決めて痛くなる。是れも今迄胃をいぢめた
酬ひであれば致方ない。

外に病はないが是れが近頃の僕の体の近況であ
る。

次に僕の近頃の生活である、と云つたつて會社勤
めに疲つた事は少しもない。然し東京は好い処で
ある。會員が沢山住んで居る。時々會つてくだら
ない話が出来る。此のくだらない話と云ふものは
會員以外には出来ない種類のものである。

何時の針葉樹會でもそうだが會が終つた後で何
んだが馬鹿になつた様な賢くなつた様な気がす
る。是れが針葉樹會の特徴なのかとも知れない。賢
愚相寄り相集つての會であるから愚が賢に染り、
賢が愚に染つたりする。其処に何んとも云へない
妙味がある。あの會の馬鹿話から人生の或る訓を
受ける事が沢山ある。昔支那に竹林の七賢人が山
中に籠つて世を談じ世を笑つたと云ふ話を聞いた
が今は大江戸神田一ツ橋の里如水會館で三十餘賢

愚人が集つて世相を諷し超世間的の議論をして居る。

竹林の七賢會に優る事違かなるものである。此の會の存在が僕の生存を意義あらしめて居るものの一つであると思つて決して過言でない。

今や僕の生活は肉体的には徐々に崩壊の途を辿りつゝあるに反し精神的には益々健康の途上にあり。然り而して地方會員諸兄の御健康や如何に!!

一九三二、七、三

近藤恒雄

御正体山行

初夏の一日の山の旅にかねてから行き度かつた御正体山に登つて久し振で山の空気を吸ふて来ました。谷村を朝四時に出かけて鍛冶屋峠のゆつたりした坂をこえると道志の山々が霧にまつまれて姿を出し始める用地村の里宮から御正体の三角点の東南側の有途こゝから講中のつけた井八町に分つて一々道しるべがあるから道についてゐる殆んど何等の不安もない。途中十二町目辺に休み場がありこゝにはキヤンプに好適と思つた水は傍に充分あり秋の月見には良いと思つた。此の辺は如何にも沢らしい湿つた空氣にみえたが其れから上は潤葉樹の林になつて極めて明るい山である。肩の尾根に出るとこゝには奥宮がある此の裏からは一

寸山らしい威のする路である。岩や樹もあり尾根がたいから天候さへ良ければ富士の素的な眺めもあるうちに全く霧にまつまれて何も見えない頂上は一等三角点が大きな櫓があり此処は明い威の良いいれで一面にキバナウツギや白花ノへビイチゴ等が生えていた四五年前南アルプスで始めて見た深山の植物に再會してあの両股を思ひ出した。降り道坂峠への道を隨分急な下りであるが終りはカヤトになつて丹沢の方への好展望台をなして道峠の二つ前の道を左に下りて用地村に下りた此処からは曾て歩いた路である。愉快な山旅をしてふり返る御正体の大な山が屏風の様にみえて見える。秋紅葉には尚更よいと思つた。

(久保田)

野球試合

浅野セメント會社野球団の重鎮であり我が針葉樹會の元老たる孫さんが突然として針葉樹會員競役員との野球試合を提議して本月三日国立の野球場に対戦する事になりました。其の日の記録は一大対一で針葉樹會が見事に現役団を一蹴したんです。丁度二三年前角力の選手権争奪戦があつた時角界の古老板木山が現役力士を軽く扱つたのに似て居ります。

何しろ山へ行つては物凄く現役部員も物を投げたり打ったりする事はからつきし駄目なんです。何しろ野球のルールを殆んど知らない熊さんが安打を放たりして得点をあげるんですからお話になりませんよ。熊さんは二塁でも三塁でも一度踏めば後は「セーフ」と決めて一塁と同じ様に拾いも拾いも先逆走して行つてしまつて裕々と塁に歸つて来てタッチされて「アウト」と云つた様な調子ですから。O.B.野球団は試合進行中に選手に「ルールを教えねばならぬし仲々忙がしいですよ。浅野野球団選手が、熊さんが欠席しても結構選手に「ルールを教えねば勝てるんですから現役恐れるに足りませんね。安田銀行サグ投手事謙ちやんが此の目正投手の位置に就き拙者が捕手に云ふ「バッテリー」です。サグ投手と云つたつて整球の正確なる事機械の様なものですよ。

第一球「インコーナ」第二球「アウトコーナ」第三球真直にほり込んで三振と云つた工合で捕手たるもの至極呑気なんです。

敵軍の主將格堀岡奮慨して「ホームランを打つ、然れ共我軍驚かず。

此の日我軍の陣容は熊さん、要ちやん、謙ちやん、山君、僕と現役二名拝借（一番下手な様な人を借りまして）してやつたんですよ。

試合は勝つたし氷の這入つたビールは飲んだし風呂もあびたし、久振りで部室で御馳走にもなつたし申分のない愉快な一日でした。此の日熊さんとペンちやんが来たらどうだったらう。第一回の我軍の先攻だけで日が暮れてしまつたのではなからうか。試合の后に謙ちやんと二人で四百米のトラックを一周（走つたんですよ）しました。

それから数日の會社勤めのツラかつた事／＼足は痒の様になつてしまつたんですよ。仲秋の明月を利して国立の部室で大宴會を開く事になつて居ります。北海道並に関西の諸兄よ、来り會せよ。

（近 藤）

初夏の山

五月初始め赤城へ登つた

赤城外輪山麓箕輪からはだら／＼した坂路を、銀座でも歩く積りで登つて行つた。唯金田の左手に下がた真真器だけが一寸変つて居ると云へば居るだけで後は都大路を歩く其儘の恰好の私達も、若葉返しに照り返される強い初夏の日に、帽子を取り、上板を抱へ、ネクタイを外し、賭けにでも負けた時の様に一枚／＼はがされて行つた。

のそ／＼と歩いては居るが、重いリュウサックを背にした時の歩き方とも違ふ、口は絶へず何か

を語り、三人とも横向きに登って行く——う、う、と云ふ寫真で見た、モンブランの山じまいに山麓の人達が輪をかいながら登って行く様に——大沼を背景に金田の長い図体と並んで白樺の枝にだらりぶらさがった吹出し度くなる寫真を取る。と又一くさり迷譜義が続く。

「何故外輪湖だかかゝる？」

「いや、どうして？」

「結局、一番深い所が湖心よりも外側の岸にあるからさ。」

田中阿歌麿氏の「趣味の湖沼」による速成的受売。

昨日が土曜日のせい、山で一泊して来たらしい様々な人が下りて来る。手には靴を大事さうにぶら下げ、足は足袋さだしの群、酒びん片手に女と一緒に両方とも酔っぱらって下りて来る群、小さいリユークサツクを背に登山姿甲斐／＼しき若人の群、此の最後の組さへもまるで私達とは全然関係のない別世界の人の様に感ぜられる。

此の私達を見て、先年まで一里を三十分で駆け歩き、五貫も六貫もの荷物を肩に一日中暗い谷底を遡行し、猛烈な吹雪の中をスキーで槍沢を滑り下りた其人とは想像する者はあるまい。都會では初夏の明るい日ざしが街のペーグメントを照らし、行き交ふ若き女の姿にも冬の衣から脱した美しい

五月の女が見られる頃、私にはなつかしい思出がきまつて繪の如くま／＼と浮ぶ……若葉の縁が洪水の様に漲り溢れ閉めた壁数の障子にまで反映する山の温泉麓教湯の一日、又新緑の色滴るハッ岳川俣川の兩岸、左岸の山に繁茂する虎枝の廣葉は一杯に初夏の光と湛へ、空から柔い薄青い光線が木の間をくぐり込んで来る谷、燃ゆる様な山つつじが道の両側をはさんで咲いて居る黒姫の裾野道。

もうそうなると都の騒々しい中にじっとしては居られない、不思議に旅へ出たくなる、夢中で都會を、家を出たくなる。丁度うまく同志を探がし出して行く事もある。毎年の様に私を誘ふ者は初夏の青空だ、澄み渡った青空の下、高原、散在する白樺の疎林、空を限る地平線、夢の様に霞む白い山脈だ。春とは云へ、雪溪の上を這ふ虫に新しく春らしきものを見付け出す冬其まゝの初夏のアルプスは不思議と私の心を誘はない、人間的な柔さを持つ高原に旅心を感じた、こづして毎年初夏の頃にきまつて出掛けた私は又今年も赤城に登ったのだ。

(はるを)

會員消息

浦松佐美太郎 赤坂區青山南町五の三五に転居す。(電話従前通り) 太平洋同題調査會の仕事

で夏山へも行かれない程忙しい模様、

渡辺九郎 六月十四日御子息御誕生、聰と名付けらる。

高木英二 六月八日長男滋御誕生

芋川総一 株式會社大村商店(京橋區愛宕島一

ノ一六、電話京橋四八八、八二四、八二五、三七五七)に六月より就職勤務す。

宇佐美敏夫 オリソビツク、ホツケー選手とし

て六月三十日午後三時横浜開港の大洋丸で出

発せり(九月月上旬歸朝の予定)

金田一郎 五月二十八日より三日間手塚と共に

赤城登山、目下就職運動中

磯野計藏 病氣の由、

村尾金二 御父君の一週忌にあたり七月初旬歸

着せらる。一橋山岳部新入生歓迎旅行に谷川

岳登攀す。

中森長太郎 三商大校上競技対抗應援のため七

月十五日来京す。

久保田礼治 六月十九日御正体へ、八月よりハ

壬子店勤務。

近藤恒雄 六月八日赤沢林道より四万温泉へ、

會社の方と歩く。

編輯後記

◇ 六月の針葉樹會の席上で、従来針葉樹會員が毎月発行して居た針葉樹會報と、一橋山岳部で年五回発行して居た一橋山岳部報とを合併しようとして云ふ案が出され席上でまとまった。是に依つて一橋山岳部の方の経費は節減され、先輩群の方は従来のまゝで出来る予定です。次号からでも學生の方の原稿ものせ編輯の手傳ひもやつて貰ふ事になります。

◇ 私達の仲間から最も早く有名になったオリソビツク、ホツケー選手宇佐美君を送つて、金田久保田両君と佐藤弘先生夫妻と横浜沖までランチのつて行った。中川さんに頼まれた扇子五本に木製矢立は間違なく彼に渡したから、九月歸國の時には素晴らしい土産物となつて針葉樹會の席上を賑がす事だらう。

◇ 国立グラウンドで中川先輩の提唱にかゝる學生対先輩群の野球爭奪戦を七月の第一日曜に行ふた(近藤氏の野球試合参照)

◇ 七月八日針葉樹會

◇ 今度の針葉會報の発行が予定より半月程おく

れた事をお詫びします。百貨店は中元時期が書入時で朝八時より九時半までの長い勤務ですが、其上私の家庭に一寸ごた／＼があり園山會計幹事が會報の発行のおくれることは御心配なくと云ふを唯一の救い船と、それでも漸く八月発行まで漕ぎつけました。

部室だより

昭和五年十一月復活した第六号まで発行された一橋山岳部々報も山岳部が一橋會のごた／＼等で財政的にめぐまれなくなつたために此次から針葉樹會報と合併させて戴くことになりましたので御挨拶旁々この紙上を拜借して部の近況をおしらせいたします。

去日「針葉樹」第六号を発行いたしました。既におうけとりのこと、存じます。

山岳部の今日を育て上げて下さった諸先輩方絶大な御努力の万分の一の御恩報じ迄と念を入れて作りあげたのです。が出来上つてみますと色色な欠点が見出されます。この点編輯委員として切にお詫をいたさなければなりません。

前にも述べました様に山岳部は財政的にめぐまれてゐない現状にあります。「針葉樹」もなるべ

く多く売らなければなりません、何卒、を御諒承下さつて誠に御迷惑とは存じますが御後助の程をお願ひいたします。

「針葉樹」の仕事に幾分勢力を殺がれましたので今年の夏山は劍と黒部の東沢と上高地の三班しか出ておりません。劍は七月中旬の雨のため駄目になつてしまつたといふ報をうけました。現在では上高地に四五人の部員が入つてゐるばかりです。「針葉樹」の仕事も五日で一段落をつぎますのでその夜、清水増山と上高地に入る予定になつております。

今年の夏山もこれが最後のものと思はれます。甚だ粗畧ですが山岳部の近況御報告まで

(太田)

終り